

巻頭言

坂井純人

福音主義神学誌の第 47 号は、「福音の理解—罪をめぐる—」の特集号となった。しかし、この問題意識は、2014 年刊の「福音主義神学、その行くべき方向」(1) 45 号および 2015 年刊の「福音主義神学、その行くべき方向」(2) 46 号の問題意識とも通底している。本号編集の意図は、近年、福音主義神学を標榜する諸教会、諸神学校、神学徒が共通して直面している、所謂ポストモダン、ポストリベラルの波の中での聖書信仰の内実を問う〈揺らぎ〉への対峙に向っている。この揺らぎは、具体的には、キリスト教信仰の根幹に関わる多岐に渡る分野に及んでいるが、福音の理解において致命的な問題が起こるとするならば、それは、「罪とは何か」の理解ではないだろうか。罪の理解が聖書そのものから離れて、不問に付される、あるいは、軽視される、さらには、「再解釈」されてしまうならば、キリスト教信仰は、一体、「何からの救い」をキリストにあって信じているのかが、不明になるであろう。元来、キリストを信じる信仰を通して、「義認」される恵みと喜びの強さは、「罪」の理解の把握と表裏一体の関係にある。「罪と滅びからの救い」こそ、福音がもたらす喜びの源泉である。この事実と原点を、特に、宗教改革 500 周年記念を目前に控えるプロテスタント諸教会に連なる我々は忘れてはならないだろう。

しかし、現実的には、本号所収の論考に言及されている通り、「原罪」の教理の軽視、ないし、忘却の様相すら呈する多くの現代的状況への懸念が根底にある。教理史的には、正統教会の福音の把握の喜びの原点には、「罪からの救い」が明確にあった。アウグスティヌス、ルター、カルヴァン、ウェスレーいずれの流れにもそれは共通の確信であった。恵みのみ、信仰のみによる救いの確かさは、神との関係における罪の理解がキリストの十字架と復活の福音の光の下に置かれてこそ、輝き出るものであった。キリストを見失う時に、我々は自ら

の本当の姿を見失う。キリストにある救いの喜びに導く聖霊の導きは、まず、「罪が見えなくなっている」我々にその惨めな姿とそこからの救いを指し示ものである。福音主義神学が何たるかを問う内実は、「聖書信仰」であると言われる。続けて来たが、さらにその聖書における福音理解の内実は、「罪論」においてもその姿を現すであろう。今回は、聖書における罪の理解および福音における罪理解の深まりを提示した教理史上の典型例についての論考をコーディネートした。今回、掲載されたいずれの論考にも、「罪論」の理解にこそ、福音の内実は関わっているとの問題意識は明瞭に継承されている。

平塚氏の論文は、モーセ五書における「肉」の象徴的意味を問うもので、神の御前の肉なる存在としての人間の自己理解と共にキリストが肉を取って来て下さった福音の意味を深く理解する上で、多面的な角度から五書を中心に「肉」の象徴的意味と「けがれ」、「罪」、「死」からの救済に繋がる神学的内容とを明らかにしている。

公文氏の論文は、創世記3章における罪と死の理解に関わるもので、聖書言語における深い意味に留意しつつ、聖書本来の罪と死の意味を浮き彫りにしようとする試みである。

三好氏の論文は、神の民に対する「神の怒り」をテーマにイザヤ書1章から12章を中心に考察している。人間の罪への神の怒りの根源には、「神の聖さ」がある。この神の聖さを、神は、罪人である人間に、理解可能な神の怒りを通して啓示し、その裁きと救済への道を明らかにされる。神の主権性とそれゆえの神のみによる救いへの道が神の聖さと罪への怒りを通して鮮やかに示される。この意味で、「神の怒り」の正確な理解は、イザヤ書全体を読み通す鍵でもあることが示唆されている。

鈴木氏の論文は、ルーテル教会の立場から、いかに信仰義認の教理が深く原罪理解に根ざしているのかを教理史的にも強調しつつ、他方、現代がいかに「罪が見えなくなり、語られなくなった」時代であるかを自身の博士論文執筆の動機や神学史上の変遷を紹介しながら、その問題点を明らかにしている。「今、再

び罪について考える—原罪論をめぐる奇妙な沈黙—この沈黙は何か、そしてその帰結は？」という論文題がその問題意識の深さを物語っている。ルターの宗教改革500周年を目前に控え、同氏の訴えと真摯な呼びかけに、プロテスタント陣営の諸教会は、今後、どのように呼応するのだろうか。

吉田氏の論文は、カルヴァンの罪理解を初期カルヴァンから幾つかの論述を経て、「キリスト教綱要」決定版に至るまでの変遷を追って、その問題意識の深まりに迫る実証的研究である。カルヴァンの福音理解の深みとその根底にある罪理解の深さがいかに密接な関係にあるかが浮き彫りにされている。文献学的にも詳細にカルヴァンを読み、理解されたカルヴァン研究者ならではの貴重な歴史神学的研究となっている。

國重氏の論文は、ウェスレーの罪理解が、教理史上、西方教会の正統的伝統を忠実に継承するものであると共に、東方教会の理解の真理契機をも汲み取った統合的性格を持つものであることをウェスレーの著作から明らかにしている。ウェスレー自身の罪理解が重層的に深まる過程が論じられている。

三浦氏の論文は、研究ノートとしての寄稿で、マタイの福音書2章15節におけるホセア書11章1節の引用問題を扱っている。直接的には、第45号に掲載された山崎ランサム和彦氏の新約聖書における使徒の解釈方法をめぐる新たな提言への応答という体裁となっている。聖書釈義、特に使徒の旧約引用を巡る論考であるが、論点は、聖書解釈の技法や方法論の問題に終わらず、旧約聖書の成就の意味と聖書靈感論の理解にも波及するゆえ、重要な問題であり、今後の福音主義神学のあり方を探る上での貴重な提言となっている。

今回も各専門分野から、内容のある論文を寄稿していただき、編集委員会一同、執筆者各氏に心から感謝の意を表したい。我々、編集委員会は、聖書信仰という共通基盤の意味と内実を今後もこのような多様で活発な議論を通じて明らかにし続けたいと切望している。

(編集委員)